

正并上重實輯修身訓蒙

卷之三

K110,1
13
3



改正

脩身訓蒙卷三

第一

井上重實輯

○忠を中れ義みく。本心のたを中
と。忠といふなり。されど。文字にも
中心こかきたるが。和忠經
○忠乃おのほと云は。外よりあす
わざいへる。我一身より行ひ出

せらるるのかり。和忠經

○人を親を愛するは心を以て。其君を愛するを盡さざるなし。宋孫固傳

○臣乃君より事するは。輕重貴賤に等級を無きことあり。自修編

○心を盡し。職を奉じて敢て怠らば。尚書

○力を竭し。勞を盡して。其報を望

まます。臣軌

○忠臣は身を先ゆりて。君が後不勞に。魯仲連語

○難はたゞて節あはれはあはれ。忠臣なり。史記

○官乃大小は。異あること。忠あり。楊原語

第二

○人倫を一切くするは道なり。まづ父母より孝とつくすを本とす。初學訓
○愛敬の心と以て。能親に養ふを孝とす。同

○人子に孝は親を養ふを本とし。以て其志に順ひ。死生禮に違はず。是れ孝誠の至あり。畜徳録
○父母の尊き恩天地に同ド。子の

之に報ゆる孝養。須うらく至るべし。

童子習

○親に順ならされむ。以て子に順ならず。孟子

○親に悦ぶるは道あり。身は反志て誠あらざきむ。親に悦ぶまじす。同
○親に得ざれむ。以て人となるべからず。同

○子を尊ぶは道也。自ら卑くして。其親を尊ぶべし。自ら重んじて。其身を愛さべし。 邵子語

○歡びと膝下に承れむ。片時の間も。千金に換へず。 張正卿語

○たゞ父母に命ふ。道で違はざるべから。是好き子なり。 陳眉公語

○孝子に親の過ちと言ふべし。 蔣龍光語

○子よりく。孝あまむ。父の心寛なり。 傳家寶

○大抵人れ子。父母と愛するも。父母の子と愛さるも及むず

時習編



第三

○學者志を立てるありと。勇猛ありしめ
を自ら進むことあるべし。朱子語類

○志を立てて以て其本を定め敬み
居り以て其志を持つ。胡五峯語

○志何る者ら。其事竟ふ成る。光武帝語

○志此立ち。學の半あり。畜徳録

○志を立てつること定らざれば如何

ぞ書を讀まん。朱子語類

○子曰く。吾十有五にして。學に志
すと。聖人一生に精神命脈を。たゞ

志學の一言よりあり。許敬庵語

第四

○學問乃道を他か。たゞ道を知
りて。善惡を明し分ち善を行ひ惡
を去るに在り。初學訓

○善哉行ふ道はま川孝弟と本こ
して人倫甚厚く行ふなり。初學訓

○學問まゐるふを専ら道と知らん
こと成以て心とすべし。同

○知とむしくおとは學問乃功
あふまらんを成つたり。大和俗訓

○幼少より習ひ成就したるは
天性よむゆれつきたるもの如し。同

○久く習ひ慣きて深みぬること
ちねも何しきと勤むると自然よ

とふまふが如し。同

○始の違ひも少なきと後の過り
て千里乃遠よいなる。其始め學術
を擇ぶこと慎まざらんや同

○常人の情纒はほいままかれを
日は曠蕩に就き自らほごやう

よすれむ。日に規矩よ就く。程子

○善哉見ては則ち遷り。過あれむ。則ち改む。易經

○第一善と好まばれむ。書と多く

讀ても。道と行ふ處き基ある。大和俗訓

○讀書多き故貪て。精しめらざれ

ば。徒よ身心と勞き。傳家寶

○讀書を三到と要を眼到り。心到

る。口到る。學堂條約

○書にゆれぬも。讀ざれむ。書かきと

同。傳家寶

○讀や雖も書理と明よせばむむ。

讀ずると同。同

○小兒乃學問をまじ訓話等れ文

字と理解して然る後ち以て上を

を語るべし。呂東萊語

○童稚は學はたゞ記誦するに止
まらば其良知良能と養ひまさは
先入乃言伐以て主とすを

楊文公家訓

○古の人幼學より耳目遊處の見
依せぬ乃皆善きものかれを年長
びるに至ても異物伐見ずゆゑよ
もつて成就しを考し程子

○みちを人よとはこのうらず
は事とを外なれば故よ古人は教
を其能食ひ能く言ふよ衆之伐訓導
し整齊せしむる所以れものハ法
也

程董學則

○聖門學を意へ勤る伐以て正脈と
し逸して豫を以て痼疾とす
○業は勤るよ精く嬉むよ荒む

魏莊渠語

韓愈語

讀書五戒
 莫看間書
 莫說間話
 莫做間事
 莫走間路
 莫費間思
 惺齋銘紀

○人ち勤むるのみ
 有り。法とせられた。
 學之_訓からば。初學
 ○學者最も時日
 を惜むを要す。豈
 時を廢_知一日を曠_要
 うすべけんや。初學
 ○今乃人みか其

劍戔砥勵するを知らざるも。其
 身と砥勵するること。我知らば。それ
 學は身比砥勵なり。尸子語

第五

○人ち誠なげきは。自から欺き。人
 を欺くにいはる。故に萬の事。誠戔
 本_{初學訓}とす。勉_{初學訓}。

○人常に我身にかへりみて。道戔

求むる。たゞ實とはとめて。外と
稱がふ心あるべからず。 大和俗訓

○言找出し。事と行ふ若し沉實な
ずして。専ら輕浮に習ふ。必ず器
と成らぬ。 傳家實

○輕言れ者多し。悔い多く。輕動れ者
多し。失ひ多し。 同

○輕合れ者多し。離れ易く。輕喜れ者

多し。怒り易し。輕取れ者多し。必爭ふ。輕
聽れ者多し。必疑ふ。 同

○一事找増さんよら。寧ろ一事
と減らす。 紳瑜

○一言と多せんよりは。寧ろ一言
少なくすべし。 同

○駟馬追ひ難吾。三つびその口と
緘んと欲す。 金天基語

第六

○本源同く是一體なり。各謙和と以て心とかなと要す。傳家寶

○三親乃内。父子夫婦よりも交り久きは兄弟なり。初學訓

○兄弟は愛を天性より出で。少小より衆相従ひそのまゝに歡欣す。豈に乃て何んや。畜徳録

○長者めを免む。幼者志をまづむ。周禮

○友弟和まると。琴瑟に如く。文選

○君子を睦きよ。因て以て族と合禮記

○些少乃事に因て。手足は恩情と傷るなれ。傳家寶

○義と他人を結ぶんと衆は骨肉に親を周全するに如く。訓俗遺規

○兄を弟の不悌と患へず。友道に
至らざると患ふ自修編

○兄弟牆よ鬩ぎをなす。外その侮り
と禦を。詩經

第七

○仁者を萬物と一體と爲。故よ人
倫はいふよ及ぶず。物と一を愛せ
ざることなし。大和俗訓

○父母兄弟は愛を多かる。仁と行ふ
乃本なり。同

○人物を愛さゆ小。親きより疎を
に及び。重きより輕なり。いたるべ
し。同

○人を見ふ小。仁を以てするは。慈
悲憐愍と。施まをいへり。自修編

○人皆人よ忍びや。るの心あり。孟子

○あるひと貨財を愛するも存せむと用ふるに力と竭して救済に及ばず。人事道

○苟も心を物に愛するも存せむ人に於て必濟ぶ所あり。程子語

○物に遇へむ輒ち救ふ。傳家實

○小惠と施し。大體と傷ふな

後。言行彙纂

○一樹とたち。一獸をあるまに。其時を以てせざるは。これ孝なり。らざるな。梁。孔子語

第八

○凡そ人倫乃道。朋友の教へ戒。此助によりて。立以理を。朋友を亦重き人倫なり。初學訓

○善と責むるを。朋友の道なり。

孟子

○門を同らうする哉。朋とらひひ志と同らうするを友とらひふ。春秋公羊傳

○朋友信ありと云へば。朋友は差別なく。みお信と盡まさぶ。自修編

○信なけきをた。真に愛敬あいらはらはらば。

大和俗訓

○信なくくては。人少す我と此心感通

せほ同

○凡そ交り近ぢをれば必相あひ磨こらるに。信を以もつて遠とけば。必ず忠告ちゆうこまる小こ言ごを以もつて去る。莊子

○我身よ善ぜん哉行いく。人お善ぜんと勸すすむべし。大和俗訓

○我身に惡あくを去さるて。人の惡あく哉戒けいむべし。同

○君子を先づ擇びて而して後
交る小人を先づ交りて而して後
は擇ぶ故に君子ハ尤め寡く小人
ハ怨み多し文中子
○友を擇ぶにして濫りに交れず此
れ日は膠漆の如きも他時を氷炭
と化する傳家實
○交るや出るや賢徳の人よりあり

豈に貧と富とを論せんや同
○損友を敬して遠くをて益友を
亘しく相親同
○善人を不善人の師あり不善人
は善人れ資けとなる老子語
○君子を人の歡びを盡はせ人れ
忠誠竭さざるは交るを全するを以
て禮記

禮記

○君子と遊ぶを。芝蘭の室よ入ら
如し。久くして其香を聞ずると。則ち
志と化す 大義禮

○好人と成るを要せば。好友は結
ぶ 傳家寶

○交れ道を。猶ほ素れ白き。のぶ
とし。之を染るに朱。或以て赤を
赤く。之を染るに藍。と以てまれば

青し。 燕子語

第九

○忍と云ふと
亦善行あり。忍
と云ふ。あらゆる
し。初學訓
○怒中此言を
發せし速し



を悔ゆるはわそ一思ふた一省と
るべし。傳家寶

○一乃慙哉忍ばずして終身此慙
なるを苟も念ひ去るに及ぶを念心
自ら息む。訓俗遺規

第十

○凡そ人ごなりたるを常よ敬此心
をたもちて志むしを失ふたうら

位。初學訓

○位の高き卑た品よりよりて。敬
此淺深を。このされども。凡そこのやま
ひて。あるとるなごのうら。同

○禮を敬するのみ。忠經

○自ら重たざる者を辱先哉ゆる。

自ら満たざる者は。益とらうく。傳家寶

○君子の容は舒遲なり。尊者哉見

て冬齋邀し足も重くして手を恭
志く。聲を静よして氣を肅む。小學詩禮
○目よ惡色を視む。耳よ惡聲を聽
みむ。法よ非ざるを敢て道はず。徳
よ非ざるを敢て行なはぬ。同
○長者よ侍坐をまむ。必安ん志て
なんぢに顔を執き問ふことあれむ。
譲りて對へよ。及むされむ。僂言を

ること毋りま。同

○立つよ敢て門よ中せず。行くとよ
敢て道よ中せず。坐するよ敢て席
よ中せず。居るとよ敢て奥よ主とら
ず。同

○喜怒必節よ中り。周旋必禮よ中
り。淫惡ハ心よ接へず。惰慢ハ體よ
設けず。同

○食ふ時。語らば。寝る時。言は

論語

○禮は自ら卑くし。人と尊ぶべし。貌のこ恭謙をゐすよあらざる

あり。知世事

○自己の好きと有るも。説くはか
らず。そし一分れ名を説けば。即ち
一分を減せん。傳家寶

○他人善あらば。必ず揚ぐべし。も

し一件れ徳を揚げは。亦一件は進

免ん同

○古れ人小より長に至るまで。其

在る所よ於て。皆謹みを致す。幼儀
雜箴

第十一

○儉を美德といへども。太ら儉を

流む。各むお近し。金書

○行ひをばしむすにせざるも身
だたも川の道な衆財をみざるもに
用ひばらも家をとをも川の道あり。
此を儉約と云。初學訓
○世間の財も得ることを難く。用ふ
はとわやすしと為し儉さるべ
し。空しく勤むべし。傳家寶
○諸事入を量り。出さると要どたり

同

○富が儉朴に衆きたる。同
○儉ゆき能く施すは仁なり。儉
に求め寡きは義なり。倪正文語
○全く備ふを求めず。非分を想は
ず。天物を暴殄せざ。五穀を賤くせ
ず。傳家寶
○儉より奢り入ることを易く奢り

り儉子入ること難し。張文節語

改正 修身訓蒙卷三終

明治十六年一月廿七日版權免許
同 十七年十月八日改正再版御届

編輯者出版人

井上重實

佐賀縣平民 定價金十錢

東京赤坂區河池樓拾三番地

發兌人 柳心堂

山 中喜太郎

東京府平民

東京赤坂區河池樓拾三番地

賣捌人

山 中市兵衛

山 中孝之助

伊 東武左衛門



井上重實輯
正
修身訓蒙

卷之四

K110.1
13
4